

令和6年9月25日

能美市議会

議長 田中 大佐久 様

総務産業常任委員会

委員長 卯野修三

総務産業常任委員会 所管事務調査報告書

当委員会では令和5年12月より、下記の事項をテーマと定め、調査研究を行ってきまして、調査報告をいたします。

記

1 テーマ

観光と交流の推進について

2 はじめに

能美市における観光と交流の推進は、交流人口、関係人口の拡大を牽引し、本市の魅力を伝え、発信し続ける重要な施策といえる。

近年の観光形態は、団体志向から個人志向、滞在型そして参加体験型などに変化してきており、地域独自の食文化、現地の人との交流、そして、スマートフォンで調べ、SNSで発信するなど、旅行スタイルは多様なものとなっている。能美市として観光客の心を掴むには、流行の観光スタイルを把握し、本市ならではの自然・歴史・文化・産業を活かした個性ある魅力づくりが必要である。

また、観光形態だけではなく、能美市をとりまく観光の環境も、2015年3月の北陸新幹線金沢開業から始まり、2024年3月の県内全線開業、2025年大阪万博など、この10年で大きな変化が起きている。

本報告書は、能美市が今後、観光と交流の取り組みを推進していくうえで、その一助となるべく、提言を含めての所管事務調査をまとめたものである。

3 現状と課題

能美市における観光の現状は、能美市観光アクションプラン 2019 にも記載のとおり、2015 年の北陸新幹線金沢開業で、石川県の認知度は上がり、観光客は大幅に増加したが、観光の需要は金沢市に集中し、能美市への訪問者及び宿泊者数は 2015 年中は伸びたが、2016 年は減少となった。

そこで、能美市観光アクションプラン 2019 では、観光地としての受入環境整備、着地型観光の確立、観光まちづくりの推進、地域資源を生かした観光プログラムや特産品の開発、地域連携による観光事業の拡大の 5 つを施策の柱として取り組んだ。しかしながら、2020 年 1 月からの新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、当初の観光施設・イベント等入込客数の目標数 310 万人の達成は難しかったとの報告を令和 6 年 2 月の総務産業常任委員会協議会で市執行部から受けた。また、ブランド総合研究所の地域ブランド調査で、2023 年の全国の都市の魅力度などの数値が明らかになり、能美市の順位は 2018 年と比べ、魅力度は 613 位から 538 位。認知度は 712 位から 608 位。情報接触度 763 位から 677 位。観光意欲度は 525 位から 502 位。産品想起率は 693 位から 472 位と、関係者の努力が実り、改善は進んでいるが、まだまだ全国的には認知度は低く、観光地の候補地として挙がらないのが現実であった。

この結果を踏まえ、能美市の観光について以下の課題が明確となった。

1. テーマ性を重視した周遊ルートの開発、案内看板の整備。市民・民間事業者との連携による観光体制の確立。自動車を持たない人でも市内を楽しめる二次交通の充実。
2. 観光客の滞在時間延長に向けた九谷焼・産業観光・里山など能美市の特色を生かした体験プログラムの推進ならびに能美市の強みである、お人柄にふれていただくプログラムの構築。イベントを通じた能美市の認知度の拡大。
3. 一般社団法人能美市観光物産協会が能美市の観光を牽引する組織になるための機能を確立。能美市を訪れてほしいターゲットの明確化とそのプロモーションの実施。
4. 能美市の物産品で継続的に売れる商品の開発。
5. 北陸新幹線県内全線開通したが、南加賀 6 市町との広域連携の事業推進及び小松空港、北陸新幹線を活用したインバウンド（外国人旅行者）に向けた情報発信。

今後は、市だけにお任せでなく、市民も観光に携われる機会を創出し、市・観光物産協会・商工会などと市民協働で、魅力発信を実施する時期が到来していると感じた。

4 調査における学び

現状と課題から、市民が主体で観光交流を積極的に行っている先進地への行政視察と能美市の観光事業の振興を行う能美市観光物産協会との意見交換会を下記のとおり実施した。

①行政視察研修（令和6年5月22日～23日）

富井県鯖江市の一般社団法人 SOE（5月22日）は、越前鯖江地域で、産業観光をメインとした持続可能な地域を作る観光地域づくり法人で、通年で楽しめる産業観光を推進するため、観光コンテンツ開発や宿運営、スクール開校などの事業を展開している。SOE の副理事が越前鯖江地域を日本一の産業観光地域にするという目標のもと、RENEW という工房見学イベントの開催、雇用機会の創出、地元の住民の郷土愛の盛り上げ応援企画など、主役であるものづくり（越前漆器等）の職人、担い手を第一義に考え、ものづくりからまちづくり、そして人づくりへの好循環を生み出している。

所感として、この地域では、7つの伝統工芸を線で結びつける取り組みを始めたのだが、一般的に、産地には、「ものづくりの人」と「じゃない人」に分かれ、融合が難しいところを、「じゃない人」がデザイン、販売、マネジメント面を請け負い、お互いが協力することで、産業観光を通年型へと具現化。そして、それを取りまとめるプロデューサーがいたことが、成功の要因と感じ、能美市として、大いに参考にすべきと感じた。

富山県砺波市の一般社団法人 富山県西部観光社・水と匠（5月23日）は、ビッグデータを活用したマーケティングに基づいて、多様なものづくりが集積した地域ならではの、産業観光を軸とした旅行商品の開発などを行っており、地域産品の開発・販売、空き家の活用を6市の行政、80の民間団体と協力し、6つの事業をつなぎながら実行している。

所感として、職人文化が息づく産業観光には最適の土地ではあったが、新しいものを作るのではなく、「土徳」（土地と先祖からのいただきものに感謝）の考え方で、多彩な工芸の技や豊かな自然という地域資源を活かし、表層だけのクリエイティブは長く続かないという考え方で、前日の鯖江市の SOE 同様、他地域から来た女性リーダーが中心となって運営していた。能美市にとっても、観光への取り組みは、熱量のあるリーダーが必要と感じた。

②能美市観光物産協会との意見交換会（令和6年7月5日）

- ・意見交換団体 一般社団法人 能美市観光物産協会
- ・参加者 10名

元山利朗（元商工会副会長兼観光物産協会副会長）
岩田克久（県九谷陶磁器商工業協同組合理事長兼観光物産協会副会長）
中田真司（九谷焼団地組合理事長）
東 浩一（商工会九谷部会長）
車 豊（商工会サービス部会長）
平田美実（商工会女性部長）
山本峰子（商工会女性部副部長）
中嶋敏一（市ふるさと振興公社理事長）
中出俊範（JA 能美専務理事）
東 英之（JA 根上専務理事）

意見交換会のテーマの「能美市の観光物産」について、以下の3つを中心に、意見交換を行った。

1. 能美市の観光物産で不足しているものについて

- ・北陸3県以外の方からは誤って「のうみし」と読まれることも多く、「のみし」と呼ばれるように情報発信が必要であり、九谷焼の産地であることを、もっとPRすべき。
- ・レンタカー補助制度を設けるなど、二次交通の整備と観光物産の拠点となる道の駅と同様の機能を持った施設が必要。

2. 1の解決策について

- ・県外からの観光客に対し、SNS発信。能美市に来ないと体験できないリアルな九谷焼体験。九谷茶碗まつり開催中には、全市の全業種あがてのまつりにして、周遊型観光を。

3. 観光物産協会について

- ・本気でやる気のでる組織をつくるには、牽引役のリーダーが必要であり、観光物産協会の事務所も、市役所の中でなく、観光物産の拠点の中に設置すべき。所感として、1・2・3の意見を踏まえ、まずは、観光物産の関係者だけでなく、市民も一緒に能美市の良さを感じてもらい、着地型観光を作り上げていくべきと感じた。

5 能美市の観光と交流に関わる提言

これまでの調査を踏まえ、以下の10の提言を述べる。

1. 能美市の観光物産について、運営していくリーダーとなる人材の育成が重要課題であり、官民間わず、意欲に溢れ、行動力のある方が司令塔になり、メ

ンバーが動きやすい組織づくりが急務である。

2. 市観光物産の基地となる道の駅と同様の機能を持った施設を市内の適切な場所（旧辰口フラワーセンター跡など）に、一日も早く設置し、そこには、市観光物産協会事務所も設置する必要がある。
3. 全国に名だたる九谷焼を能美市の観光物産の柱として、SNS を含めたデジタルマーケティングで、強化していく必要がある。
4. 北陸新幹線、小松空港を活用したインバウンド観光対応として、SNS（インスタグラム、X、フェイスブックなど）の発信の強化をすべきである。
5. 能美市へのアクセス手段で大きな割合を占める自動車（レンタカー）・バスに対する補助などを含めた改善と「のみバス」などの公共交通の充実などの二次交通の整備を推進すべきである。
6. 能美市だけにとらわれず、小松市など南加賀という広域観光物産連携で、観光プロモーションを大都市圏で積極的に行うべきである。
7. オーバーツーリズムにならぬよう、受け入れの地元住民の理解、連携が必要である。
8. これからの観光は、「いつでも、どこでも、どなたでも」ではなく、その土地でしか味わえない「今だけ、ここだけ、あなただけ」という、新しい観光スタイルを提案できるかがポイントになると思われるので、能美市としてできるところから実践すべきと考える。
9. 1～8の提言をベースに、地域ブランド力の向上を果たすため、観光・物産関係者を含めた市民との交流を進め、新たに地域の魅力を創造し、能美市独自の着地型観光を推進していくべきと考える。
10. 夢のプロジェクトとして、小松空港—小松駅—九谷陶芸村—いしかわ動物園—辰口丘陵公園—北陸先端大をモノレールでつなげる。

最後に、能美市には、豊かな自然、伝統工芸、古墳などの歴史的遺産及び他にはない農産物、そして、住民の市民力と地域力がある。このポテンシャルを最大限に生かし、能美市の観光物産を発展させることが、能美市の認知度向上、市民の郷土愛の醸成、能美市民としての誇り（シビックプライド）につながり、市民のウェルビーイング（幸福度・満足度）が増していくと信じている。

以上で、所管事務調査の報告とする。